

入 巻
忠臣略太平記
六

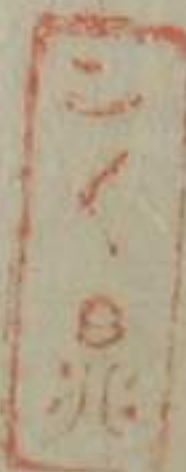
入 巻 13
1934
6止





忠臣畧大平記

卷六目錄



萩討のお綱より一板れかき

あひかりとて鉄の穂おしする敵の門は

このたれふ命の磨りやうもさなめふ

死人の死

鹿うら火のほく業部屋に隠家

甲午の殺のうらとて出でとたどけぬ敵

の形を中とてとげてせよ名うら

あがりのみ名

我これと家いへ前まへに死しびて一いっ筆ひつ死し後ごの云いひ

はらの様さまは嘆なげかたの兄あに弟あに見まま

おいりかたをさすさすさすさすさすさすさすさす

武士ぶしの書かき女め

義ぎの字なをさすさすさすさすさすさすさすさす

おそれも中ちゆう武ぶ勇ゆうあも智ちつら

は字あの字あ千せん八はち絶ぜつるの怒いからむ

まのて懐なごみの万ばん策さく

東とう討たうのお綱つなをさすさすさすさすさすさす

思おもの角かくを進しんが妻つまをり由よしを助すけ方かたへの内うち通とほりの

て款くわん用ようらむさすさすさすさすさすさすさす

妻つまを懐なごむさすさすさすさすさすさすさす

集あつめて尸しか々の骨ほねを折おつて敵てき人ひとを捕とらま

て迷まよはす利り疾しやくよ家いへを不ふ意いを撃うつりさすさす

秘ひせしあかりさすさすさすさすさすさすさす

よねさすさすさすさすさすさすさすさすさす

中ちゆうくれは十じゅう余よ人の勇ゆう士しは是こゝに同おなじく金かね鉄てつ合あ神かみのつせ

を願ねがひ書かきまはさすさすさすさすさすさす

相おさる一様は肌よ一掃切の若衆とらむぢぢひくれば袖
よも細えぬのありせかひえく津の股引しをも味をぬき
中と一ふよ一つと回し軍せまうとぬれあておとせに就
應二年二月十四日。せうけつは法成寺河原よして行掛り
布平付る陸女とらむらう口強大旗懸十一挺竹標木
標手負と枝のこまきお籠二十丁よあてくぬりせち所
並か鉾へやうを濠中さ留め大内のおあんど一人を回
してやけつは法成寺友ら負り家来とせしむ離とゆえん
為兵分武家守を宅へ礼へしうらうのう盗賊等の獲
籍よあてけつらふか合の用よあてお答の方ともあつよか
つてい推しうらふ合よ討けつらふしよもあてぬ人

救と三組よまけ二人宛とつもごとく飯をたて大暮が一
組の表門へかり八幡が一組の裏門よかり本村が一組の
あつ横倉へかり。三方一夜よあてけつの大旗懸しそ
おとあ。一統よ込入し表門番ら若衆とゆえし。是をも
いあつ事とつよあてをさしよお手を搦て先側ようかけ
つ。お月よあつる行幡福よあてく神代中よりあてらうく
と火を点とてあつの後よまをくれつあつる事日中よ異
ならず。時あつる大暮あてつよあて。法成寺友ら家来た
武家守あつよまをぬりて今敷推集する。ゆき息方と始
家中のあつよまをぬりあつる。ゆき息方と始
ういあつらうあてつあつらふらんとあてつて。



関省脱身一部をく懸く。その節前々の口々殊絶を
 以て歩陣。こころこころ。この時をわけまへつけて。いかに
 び教子の若殿形の中は元儀。一うやいせをうたへ。師
 たる侍とて復再。よもささく。しり。す。取討も入る
 常とさす。す。とわり。あ。い。一勝の刀。二人。二人。さ。う
 けて。我。人の。よ。引。わ。い。と。と。下。と。上。と。師。を。く。家。外
 敵。後。の。お。監。を。以。決。身。こ。口。入。た。者。ア。七。島。原。目。平。次。は。つ。河
 津。な。つ。つ。台。新。屋。の。橋。原。源。六。お。ん。ど。の。者。と。と。均。地。く
 を。引。抱。か。家。と。と。期。我。い。く。う。が。大。敵。を。ぐ。よう。か。つ。び
 わ。い。い。付。也。又。い。源。を。負。て。さ。さ。う。義。珠。と。さ。り。り
 目。ご。り。り。り。け。り。中。を。か。り

屍う火あつて業初屋の隠家

武蔵守用人よと云ふ。常屋と云ふ者。裏門の傍。う。小。を
 一。外。たり。志。が。取。付。と。さ。く。う。つ。と。起。て。た。力。を。師。也。の
 寝。る。よ。ま。り。以。何。と。ど。て。は。危。難。と。出。の。か。と。わ。り。で。さ。う。討
 累。次。廻。ら。れ。廻。べ。と。い。い。と。と。す。我。刀。や。絶。り。る。側
 へ。か。げ。と。て。師。也。秘。花。わ。り。け。徳。奴。と。い。ち。力。海。地。袋
 よ。入。て。刀。掛。よ。わ。り。と。や。ぐ。と。て。ま。り。お。ん。と。せ。り。而。も。小。納。戸
 役。の。何。と。と。の。袖。を。い。り。て。さ。い。う。あ。ら。山。事。と。ぞ。我。も。た。い。ん
 け。せ。よ。と。い。い。も。の。で。也。案。内。と。も。か。され。い。ぞ。と。奪。取。ん。と。引
 合。け。り。討。師。也。と。と。て。小。納。戸。の。役。人。と。と。と。観。ん。で。い

いふにわが共の播種りか。品今仰せが命よけんめよた
ういふに投り投り。折紙の具なりとて何れも惜らざるごと
とくしとせよとわりされば。と心は嬉しと氣多しといふ
よの情を思ひ入るるも此の比。いひごとく多しわらふはたれ
べ事の内と知じて。かをりみつる小納戸の役人の殺しの
難き事とて。先一書よ。あなれを情と感とらよとの勇
猛なり。歌よ。いづれ大志をよとて。りけるハ情多し。この
く。源家累代の執持として。武功天下よわらふはたれ
の武藏守師也。これよりと名乗て。火あかりとて。殺し
たれけと。心た刀風も。あまの多負。心とく。つる者も
お尋よ。より。由は。勅と。と。め。一。事。の。侍。師。也。と。名。の。り。と

中して。余の歌よ。いづれと。い。け。ど。い。は。ん。で。黄。れ。い。か。い。ふ
い。て。こ。う。い。ふ。と。終。り。付。ま。て。死。う。け。お。ら。首。は。家。あ。そ。く
お。つ。る。門。敷。よ。師。也。が。首。う。と。ん。せ。れ。い。ま。は。用。人。の。よ。い。ふ
命。多。あ。ま。り。人。お。首。なり。と。り。な。れ。わ。の。道。歌。多。し。と。は
新。し。く。と。勇。者。と。と。一。回。は。感。多。く。と。も。る。に。は。感。多
お。く。と。て。履。ち。と。通。さ。う。か。こ。い。ふ。と。ま。は。歌。八。方
を。お。巻。て。の。づ。ら。と。や。わ。さ。れ。が。股。切。べ。と。や。さ。れ。ん。か
を。わ。て。ま。い。り。ら。濁。り。と。碎。る。真。の。と。く。し。て。案。部
屋。の。方。へ。お。ま。れ。ら。ら。凡。下。の。若。の。着。と。と。物。あ。ら。ね
ば。白。小。袖。と。れ。あ。く。八。後。と。命。矢。と。つ。づ。い。て。祈。ら。い。ま。本
村。邊。に。ま。と。と。疾。り。お。び。と。い。づ。り。い。て。師。也。が。中

をんごしてつて若くは若くもよりのせはなりしん
 斬りてしるじおとをる今七とていふはあつたなり。
 といふついでに前より又門番をいひたりか。もよりの
 由の疑もあつて我々の首を早くもつらうせなま
 ぬわりのふやと涙を流してやける事よあつたは
 せし我々の先妻掛お思の座人節をよつて
 一而よ人殺をわのじい道の依けよやうやうせん
 一而よお合をりお前をいひ歌味方をとらり。揚凱作つて
 退く大妻の火の用いあがつたあつてさ尾のてし
 を改めお師を分前いひてふておの座をたすよや
 つらう。といふ前を月とてお洗の包を前をよつて
 ろを一ついふつと孫又えの法如寺川原へおまを
 とらり。皆に仲さうりや。安しそあつて休息し
 一と目と目と合使くはつて幾いお代お後の家を
 かりが。は惜くあつてお前をいひてお前をいひて
 はの勢憤はつてお前をいひてお前をいひて
 くはつてお前をいひてお前をいひてお前をいひて
 したやと今の世とて死に候て感下け。

我れ我首をいひて一筆死後れ云分

鶏鳴くお前をいひて申雷よりあつて。人づかきやうく
 ゆりつてあつたなり。は十余人の勇士とてお前をいひて
 世よ

うめむげふお連てはき控あゆへあよびつより年此は
三千計の女は束のちりきりて危のまよ女は生首さげ
たのまよ血刃おそき廻し。氣をとらふてききりけ。
あまらうくやうてうしくこれ。思ふ角もさあ女かり由
く助るるよりききりて。強よは身命をわけらうて敵よ
仕しなすい。唇の極子用を此神微細よ内通わりゆへ。
あ押身亡るの敵師並とそ危能付あよせ。目はの存念
とくじしは是併也。身の内通あどんびとたやとく中
守を違せん。皆は内働ゆへと存るなり。叔共今自ら控ら
し。女は首の何る物とていふ。子細わのて。討たなきよふじ
ゆとく尋たれ。内家懐いのみさあ。とそそ危能付

あせうも。内家あよ大悦よ存かり。叔共あゆへ亡るの敵
とまにけ。内中ささげらまわ我々我々の災の根えを
討たのて。年たり。とてけ女の首いりまきり。内存知れ。居
形へか入せ。ゆはりの房とて。女。まじり。大内方よ。是は
し。よ。あて。女中は法礼をうたが。大内方の内息女方へ。内
指面をうた。とそ。生家。の法大各の内方へ。か入。し。ゆ。瑞
鏡。渡。う。らん。ご。あ。す。と。や。は。て。女。中。は。法。礼。を。指。面。と。ら。と。
い。女。が。師。並。よ。た。の。ま。れ。我。志。の。奥。方。へ。た。か。め。使。ぎ。利
直。の。内。息。女。に。は。内。息。女。と。武。能。志。を。引。入。し。血。毒。よ。女。の。汚。湯
あ。り。を。指。面。と。ら。ゆ。を。た。ら。ゆ。へ。師。並。よ。あ。い。が。ま。指。面
と。く。な。げ。さ。う。た。奥。方。奥。女。の。名。と。ま。り。せ。た。し。い。つ。あ



よ一かろのあつりさかひしつ師をさかひせりか
く無よりん邦フナキのわいで我をさかひせりか
を手にいんこ世を巧くわくしれゆふ法ちりをの場ま有しと
よ西国さしむるをり。いふと滅したまふに
わぬ指さしあしとなく。恥辱ちじよくをわへんさへしよ。我を
塩しんあされがこころ首しゆ危いよなり。かゝる事ことに
皆みない侍しやう候こうの病びやうめが。師しをが氣きよんを奥おくよ
世よよふいひさし英人べいじんなりと。たのこせぬはさう。ぬ
ら女に中ちゆうよ。悪あく乃のみれつご。たあへされし事ことは
は女に一人ひとりがりがされば。この歌うたは玉たまの恋こひをの
り。これごとくは。おぬ女にけしよ。うらうら。お
る形かたちを。侍しやう候こうを。れ家いえ一いつ条じょう村むらの
ゆき。裏うら屋やの奥おくの位ゐ位ゐい。色いろは。女に子こよ。ま
る。この方かた書かして。渡わた世よのたつこころ。さ
た。お書かして。天あま智ちて。自みづか林はやしの田いあ。り
免く物ものせよ。といふ。れ侍しやう候こうの儀ぎを。ま
般はんを。奥おくの男おとこは。事ことを。いけ。通とほる。と。
胸むねえを。さ。一いつ刀たうよ。り。つ。一いつ刺さ首くびは。な
手て向むかへんと。只ただ今いま沙さ堂どう花はなを。ま。り。け。ま。
り。はず。と。か。こ。い。お。目めよ。か。り。て。ま。は。ち。
ま。と。か。り。と。さ。ま。の。我われが。働はたらか。ぬ。の。心こころよ。け。い。ま
の。陰かげより。お。守まもり。あ。る。ゆ。え。と。い。へ。く。信まことづ。と。お。り

る形かたちを。侍しやう候こうを。れ家いえ一いつ条じょう村むらの
ゆき。裏うら屋やの奥おくの位ゐ位ゐい。色いろは。女に子こよ。ま
る。この方かた書かして。渡わた世よのたつこころ。さ
た。お書かして。天あま智ちて。自みづか林はやしの田いあ。り
免く物ものせよ。といふ。れ侍しやう候こうの儀ぎを。ま
般はんを。奥おくの男おとこは。事ことを。いけ。通とほる。と。
胸むねえを。さ。一いつ刀たうよ。り。つ。一いつ刺さ首くびは。な
手て向むかへんと。只ただ今いま沙さ堂どう花はなを。ま。り。け。ま。
り。はず。と。か。こ。い。お。目めよ。か。り。て。ま。は。ち。
ま。と。か。り。と。さ。ま。の。我われが。働はたらか。ぬ。の。心こころよ。け。い。ま
の。陰かげより。お。守まもり。あ。る。ゆ。え。と。い。へ。く。信まことづ。と。お。り

能く約位の處り首は墓へ作らんとすものもなれり。と
 く捨てゆく下へ側の救へ投じてなげんやめてゆふよ
 後より又女のいふてきりしこといふがふらんさよ人くさ
 さまりてきさされ。さうらぶりのやさんまもい白少神よら
 申し悪物なだりさ女の首よ母で聞とがでり。さうら
 とうつさめく傍守和田松をまつが妹小ちりさりあそい
 が見うそいほききつ夫の及よ美ととれきくゆせしきと夫
 愛して師志方へうらうらう味方れ中畧者を肉通いさ
 とくを敵方よ味の回忠といねむ。形影の種とうらうそん
 為方便とてうらうらうの味方らよ。中へ近付りよめゆ
 へ味方へうらうらうさうらうと流涙はうは流よ。

是の得りやこおひら。一とせむ。一身さよすらかく
 ゆくさうらうらうらうは是れをなす方へうらうらう。自薦
 悪と懺悔一人より利害深衣の身とさう。亡き母を托
 せさうらう。美してまはの由も悪のふか。一と節をいこと
 いさうらうの製家衣の料と合力はなれ。涙をなげやられ
 ども。虫をうつすよ。さよ入るもさうらう。さうらう。あつた
 悪とさうらう。美して入るもさうらう。さうらう。あつた家
 よなれ。悪のよなれ。あつた。射死いせむ。さうらう。あつた。義
 さまりて約よ。修て約と。今もさうらう。あつた。身と。あつた。
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 びーい。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

此の頃、いふに、あつた由、此の物、を、と、め、四十余人の、お、寄、
 へ、は、修、し、て、事、お、し、連、は、後、を、切、我、久、持、し、て、汝、が、存、生、の、
 初、辱、を、死、後、よ、し、そ、ゆ、に、び、べ、し、さ、と、あ、さ、よ、お、い、て、ハ、
 妹、小、ち、り、を、離、別、し、汝、が、疾、如、住、病、到、後、の、人、此、人、と、
 他、人、と、わ、り、て、い、西、月、と、の、が、も、ん、と、れ、り、あ、り、是、修、い、ふ、
 と、ら、ら、あ、り、れ、汝、よ、に、深、切、切、り、出、庭、別、あ、ら、は、合、い、ふ、と、
 乞、し、て、切、腹、を、付、ん、由、久、持、れ、入、と、者、一、通、を、お、し、さ、ら、腹、
 十、文、字、よ、う、と、切、じ、切、り、を、ま、去、る、子、迷、首、お、い、
 ず、毛、よ、い、着、を、お、流、我、身、よ、忍、お、り、人、く、は、存、命、の、中、よ、
 い、着、危、を、お、身、れ、と、付、し、ゆ、を、と、ま、り、は、と、ま、む、し、う、ら、
 物、と、さ、う、一、部、潤、と、か、り、せ、い、人、く、
 汝、物、の、蓋、と、い、ふ、か、ら、

又、ま、ご、の、も、あ、ら、ま、ま、あ、つ、が、首、あ、れ、ば、さ、す、が、久、し、く、傳、書、の、
 一、身、の、あ、れ、お、し、く、不、定、よ、わ、り、の、も、ま、今、又、い、を、あ、ら、あ、
 て、さ、う、く、果、た、ら、あ、い、ん、は、よ、と、あ、ら、く、神、を、ぞ、ぬ、じ、け、り、
 由、は、此、物、を、玉、を、披、見、し、て、涙、を、ま、ぐ、人、寄、つ、こ、う、酒、
 たり、い、男、と、偽、女、お、碎、り、あ、ら、ん、と、お、り、あ、い、一、生、を、あ、わ、
 せ、ん、と、さ、う、せ、あ、て、と、終、時、か、よ、せ、の、碎、さ、あ、あ、ら、ん、母、之、ら、
 て、果、し、も、し、ま、ま、あ、ら、の、宮、に、お、り、我、と、遊、し、生、妙、身、か、
 ら、い、遊、付、お、果、け、し、お、れ、は、言、真、途、と、く、は、ん、先、い、首、
 葬、た、ん、と、妹、よ、う、つ、と、物、を、お、し、と、別、し、て、出、寺、い、と、さ、
 け、り、同、く、死、わ、ら、る、あ、ら、い、交、の、人、教、よ、加、り、来、代、と、名、を、
 の、こ、さ、ず、し、て、名、を、お、り、家、約、や、い、ら、ん、あ、の、よ、ま、り、を、れ、

義の行のしるの事なるの世終

かて人く此を程取らんとぬれどわたりて三三方は師並
が首を裁断前は箇人をかうして礼葬と。其陰は治
判友幽魂を夢魂の中は快ふたまふらんことをなむやう
られ熱てい日將時の闘いは家身は病にあら者日人。
師並方よは武藏守を始て死人合して二十人。身負は二十
日人あり。此は希むの妙半くふと。身安耳目と強じ
あがく世との塵はしやまらうなり。此亦は武藏守の事
提而より。歴々の傍を常向ありて。師並は頸を片後骸
よをもと。継命。其陰はくふんていそく小葬并送とていふも

らり。まてこのまへ武藏守がふる。ふる負切腹して亡び。
今年のまへ治家身のみ。師並付きて果たまふと
あられすも。扱は十八人の中懐を違とらうといふ。今を
のぶとこぞ。ぶお果んをい。其墓のあは所がれて。一乳
ぬぞ一回は死をうけ。後一文字は撥破り。後世の事をぞ
見つけ。血を身を浸して。其血の凡はまきういて。紅の
梅をらり。死骸は庭は元儀して。屠其肉は異なり
と。日十八人の内一人として。まらびきたる。死ぬなりとら
しそとこぞ。よなれ中。しと大其由は。此は人への振舞を
見つけ。後果て。しと。山墓の根は。其をくは。神と見
て。い。らと。腹められたるもの。今。あ。いの。すま。を。切。り。

小舞
玉足

さうさうとあつめあげ自ら己の死をぞとぞとく。白く神は淺く
黄く上下水晶の念珠と手に掛服一文字のまま切てと
よじかりくりひかり。般が手の若下はいといと
奏のいもつて九天は輝と。かく人の感涙をぞぞらまね
ひかりをぞぞらまね。若下の勇と勇使へる物を今
目をよらとと。ねえ津坂塔の音曲は終り略て。
人の目をよらとと。ねえ津坂塔の音曲は終り略て。
アとととりける世をスーと

後町宝町西八町

江崎市の津坂の板

忠臣蔵太平記卷之六終

小舞万葉

二〇〇



